女の居酒屋

女の居酒屋

田辺聖子

文藝春秋

女の居酒屋
昭和五十六年十一月二十五日　第一刷
定価九五〇円
著者　田辺聖子
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五・一二一一
印刷　共同印刷
製本所　矢嶋製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します
© Seiko Tanabe 1981
Printed in Japan

女の居酒屋／目次

昔のオナゴ　9
ヒマ人　14
新聞読めば腹立ちて……　19
あさはか新聞　24
ボディブラシ　29
ちがいが分る男　34
学　校　39
反応さまざま　44
タカラヅカの見方・楽しみ方　49
姥引退　54
思い出し電話　59

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おんな塾 64
女流 69
愛子カルメン 74
血まつり 79
新聞好き 84
羞(は)じらい 88
昔の格言　今の格言 93
女運転手 98
金属バットの歌 103
女のトリ年 108
「新源氏」の春 113

小説読み　118
レコード　123
ノリを踰(こ)えず　128
甘ったれ　133
お酒のアテ　138
重盛　143
かき聖　148
消すだけ　153
老害　158
未婚の母　163
原発のこわさ　168

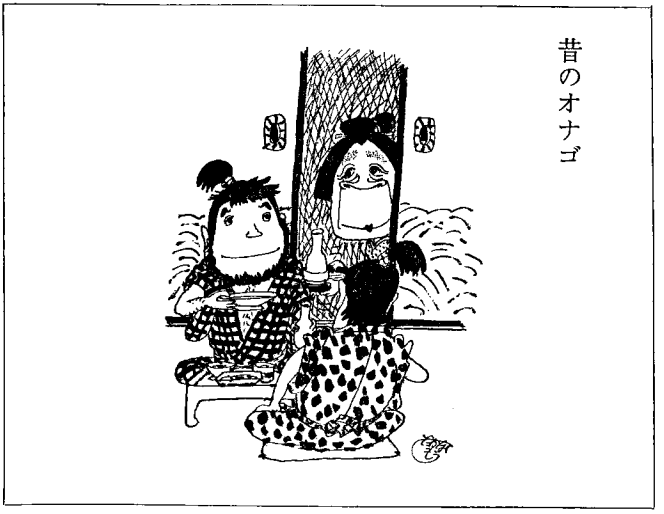
差　別　173
観念的舌づつみ　178
面白がり度　183
手にハンケチ　188
女の水気　193
夫婦のおしゃべり　198
なくて七クセ　203
「うっせえ！」　208
くらえぬ奴　213
束の間の夢　218
ハムレット　223

頬かぶり　228
少女よ大志を抱け　233
尺取虫とアリンコ　238
ご本家　243
男ざかり女ざかり　248
頓滅殿（とんめつでん）　253
シンプル人間　258
移り香　263
カモカ連五周年　268

女の居酒屋

装帧·装画／高橋　孟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



今日び。
若い男たちの保守化は、たいへんなものである。
「女は家にひっこんどれェ！」
という。
「子供産んで育ててろ！」
とどなるのだ。
「メシ。フロ。ネル。がたがたいうな、うるせえ！」
「靴下はかせろ」
「ラーメンつくれ。ハラへった。卵はいらん、ネギもいらん」
「何じゃ。オレのきらいなオカズばかりやないか、こんなモン食えるかあ！　電話かけてウナどんでもとってくれえ」
これ、誰にいってると思いますか。
お袋に、中学・高校・大学生の息子がぬか

すのでございますよ。

女の友人たちが来て、口々に、思春期の息子のやりにくさをこぼす。私は、そんな口幅ったい息子のあたまをぶんなぐり、用事をしてやらなければいい、と思うのだが、しかし彼女らはやっぱり息子の奴隷みたいに世話をやくのである。

拋っとけばいいのに、かゆいところに手が届くように世話をするから、女は男の召使いだと思う青年たちがふえてゆく。

青年が、女を見るのにいびつな偏見をもってみるのは、あれはたいてい、女親に見識がなく、まちがった育てかたをしてるからである。見識というか識見というか、女は男の召使いではない、とチャンと教えておいてくれなければ、女房になる女の子が苦労する。

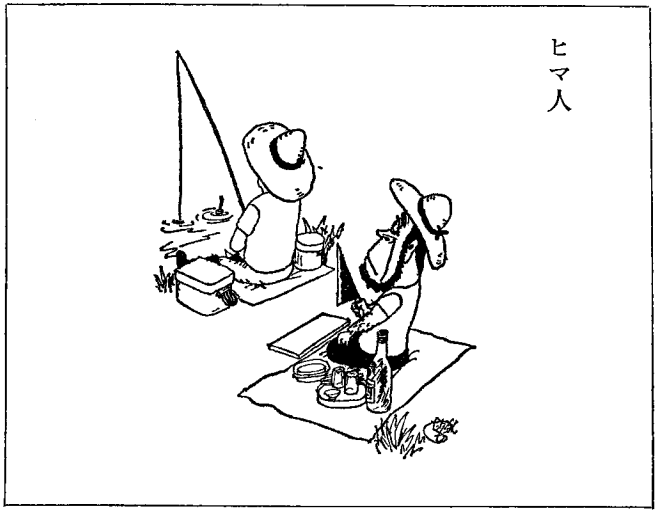
あんまり自分を無にして子供に仕えていると、結局、男文化の弊害を助長するだけである。だから、そういう男を生産しないために、私は女の子教育に力を入れるべきだと思う。息子を育てるのは所詮、女だから、識見のある、男・女のありかたについてビジョンのある母親になるよう、まず女の子の教育に力を入れないといけない。良妻賢母教育なんか、している場合じゃないのだ。遠まわりのようだが、結局それが確実に、女性の地位向上に寄与すると思うのであります。

――と、私は、友人の中年男たちの前で、一席ぶっていた。私が女性の地位向上についてぶつと、男たちのあたまは次第に垂れ、黙々とウイスキーを飲んだりする、あれはナゼでしょう。日本酒「老松」をお冷やでロックにして飲む人、焼酎ロックの人、みな、ダンダン口少なになり、

厳粛荘重な気分が座にただようのである。
カモカのおっちゃんのみ、蛙のツラに小便という感じで、一向にこたえておらぬようす、
「いやまあ、しかし、女性の地位向上もよろしいが、僕らはやっぱり、近頃しみじみ、昔の妻、昔の日本女性にあこがれますなあ。何も良妻賢母、ちゅうような、カタにはまったもんやないが、しみじみ女らしいもんが、昔の妻や母にはあった」
「そうそう」
と男たちは頓に活気づく。
「今日びの女が悪い、というのやないが」
「昔なつかしいだけ」
「女性の地位向上に反対、いうのんとちゃう、ただ、これは好ききらいの問題、個人的嗜好にすぎんのやが、昔の日本女性はしおらしかった」
私がズーと一座をねめ廻すものだから、男たちは口々に、弁解がましくいっている。
「じゃ、聞きますが、どういう風なところが昔なつかしいのですか」
と私はきめつける調子になる。
カモカのおっちゃんは、
「それ、そういう風に『何々ですかッ』なんて結論をいそぐ言い方はせなんだ。結論文化はオナゴの文化ではありません。オナゴはいつも語尾に『……』がつくように余韻嫋々としていてほし

い」
「フン」
「男と同座で酒・煙草をうちくらう、というのも、昔では考えられへん」
「へへへ」
と男たちは遠慮しいしい笑い、中の一人、
「今日び、友達が家へ来ても、女房が出てきて、一緒に飲みよる。ちっとも、向うへいけへん」
「そや。自分まで腰据えて飲んで、亭主に酒持ってこいの、氷とってこいの、と指図する」
「夫婦でお客を接待、なんていいじゃありませんか」
と私がいうと、男たちは一せいに反駁するのである。
「飲んでるときぐらい、女ぬきで男同士で歓談したい。男の話いうもんもあって、女に入られると話題に活気が無うなる」
「昔のオナゴは亭主の客が来ると、お膳だけ出して自分は台所にひっこんでた」
「フスマのかげからお盆もった手ェだけ出して『お父さん……』と呼ぶ」
「その、『お父さん……』がよろしな」
「徳利のお燗をしては、いそがしく座敷へはこぶ。次の間からそっと徳利を出す。酒がすむとお茶漬けなどすすめ……」
「タマに亭主が『お前もこっちへ来たらどないや、いま面白い話出てるねん』などというと……」

「『いえ、ここでもよう聞こえてます。笑わせて頂いております』と――」
「どうですか、このしおらしいやさしさ」
「客が帰るときは門口でおじぎして見送り、亭主はというと引っくり返って寝てるのへ蒲団をかけてやり、自分はあと片づけして火の用心、戸じまり、子供の寝顔を見廻ってやる」
「しみじみと、日本女性のよさがしのばれますなあ。大和撫子いまいずこ」
フン。私が育てようとしているのは、
「お母さん……」と呼んでフスマのかげから手だけ出して給仕する、しおらしい日本男児なのです。



ヒマ人

緑が丘という近くの公園に私は散歩にいく。ここは最近、模様替えをしようというので、池を埋めたり、二つの池を一つにしたり、「お砂あそび」の真ッ最中である。桜の名所だから、うまくでき上ると、いい公園になりそう。

ショベルカーというのですか、土をわしづかみにして、恐竜のような首を振り、うしろへポイと放下す。ギ、ギ、ギと前へいって、また土をどっさりすくいあげて、うしろへポイ。そのあとを前進後進してならしていく戦車みたいな車。

しようとしていることが、よくわかっていい。

アソコを埋めて、こっちを掘ろう、というんだなあ、と納得させられる。

どうしてこう、男の人の仕事、ならびに男の人が発明する機械というのはよくわかるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com